

名水サミット

「名水サミット in しまばら」 野田岳仁さんが基調講演



(左)「名水サミット in しまばら」で基調講演を行なう野田岳仁さん
(右)5名が登壇し、水への想いや井戸の思い出などを語り合ったパネルディスカッション

2024年(令和6)8月24日、長崎県の島原市有明総合文化会館で「名水サミット in しまばら」が開かれました。名水サミットは、「名水百選」に選定された176の市町村からなる全国水環境保全市町村連絡協議会が、地域づくりの推進ならびに水の大切さを広めることを目的に毎年開催している全国大会です。今回は名水百選「島原湧水群」を擁する島原市で実施されました。

およそ300人が集まった「名水サミット in しまばら」の基調講演を司ったのが、本誌連載「みず・ひと・まちの未来モデル」でお馴染みの法政大学現代福祉学部准教授の野田岳仁さんです。「井戸端」から考える コミュニティの未来」と題して、観光地化が

進んでもなぜ浜の川湧水は地域住民の生活の場でありつづけるのかを、独自の調査研究からわかりやすく説明し、「井戸端の再生はコミュニティの再生につながる」と締めくくりました。

また、パネルディスカッションにも野田さんは登壇。島原市長の古川隆三郎さん、島原出身の俳優・宮崎香蓮さん、地元の高校生・荒木香帆さん、荒木咲里奈さんと意見交換を行ないました。ちなみに、荒木香帆さんはその直後に行なわれた野田ゼミ夏合宿にも参加し、先輩たちに臆することなく自分の意見を述べていました(p.41参照)。

次回の名水サミットは、2025年(令和7)11月8日に神奈川県秦野市で開催される予定です。

アドバイザー会議

「アドバイザー会議」を実施



2024年9月下旬、当センターのアドバイザーである鳥越皓之さん、陣内秀信さん、沖大幹さんとセンターのスタッフが一室に会して「アドバイザー会議」を実施しました。

会議では、2024年度前半に行なった活動内容を報告し、2025年度の活動計画案をお伝えしたうえで、意見交換を行ないました。アドバイザーの方々からは大局的な見地から貴重なご助言

をいただきました。それを活かしながら2025年度以降もセンター活動を進めてまいります。

また、会議に先立ち、2024年の「ストックホルム水大賞(Stockholm Water Prize)」を受賞した沖さんから、同年8月にストックホルム市庁舎で行なわれた授賞式についてのご報告もいただきました。沖さん、おめでとうございます。

『水の文化』連載

「みず・ひと・まちの未来モデル」 島原編完結！



本誌連載中の「みず・ひと・まちの未来モデル」。4年目となる2024年度は長崎県の島原市を舞台に研究活動を行ない、その成果を2024年11月25日に発表しました(詳細はpp.36-43参照)。

法政大学准教授の野田岳仁さん、そして一人ひとりが全力を出し切った野田ゼミ3年生が、同年

12月26日にミツカンの東京ヘッドオフィスを訪し、研究活動で得たことや自身が成長した点などを話してくれました。

本誌ではご紹介しきれなかった研究成果の資料やゼミ生たちのコメントなどは、センターのHPで2月下旬に公開する予定です。ぜひご覧ください。



世界遺産への登録で注目の「佐渡」

2019年2月発行

機関誌『水の文化』61号「水が語る佐渡」

2024年7月27日にユネスコの世界文化遺産に登録された「佐渡」。いわずと知れた金山で有名な島ですが、金銀の採掘技術や農業・建築技術に、水を巧みに活用する優れた知恵が備わっていました。佐渡へお出かけになる前に、ぜひ一読いただきたい一冊です。バックナンバーをご希望の方はHPからご連絡をお待ちしています。



コーヒー・喫茶店の書籍をプレゼント!

それぞれ1名



- ①『純喫茶コレクション』(難波里奈さんの著書)
- ②『珈琲の世界史』(旦部幸博さんの著書)
- ③『KISSA BY KISSA 路上と喫茶——僕が日本を歩いて旅する理由』(クレイグ・モドさんの著書)
- ④『大坊珈琲店のマニュアル』(大坊勝次さんの著書)

今号の特集「街なかの喫茶店」の取材にご協力いただいた皆さまの著書のなかから、コーヒーならびに喫茶店の関連書籍を抽選で4名の読者に差し上げます。右の「78号のアンケート」にWebから回答のうえご応募ください。応募期限は2025年3月31日(月)とさせていただきます。

皆さまからの感想、
情報をお待ちしています!

『水の文化』78号のアンケートにご協力ください。機関誌『水の文化』をより充実したものにするため参考とさせていただきます。

回答はこちらから



<https://forms.office.com/r/9QEnwP9vNH>

送付先の変更やお問い合わせは
HPの「その他のお問い合わせ」
もしくは下記へご連絡ください。

FAX: 03 (6784) 3056

編集後記

昔ながらのマスターがいる喫茶店、ちょっと入りにくいけれど、いつかは入ってみたい……。喫茶店が放つ「魅力」はどこからくるのか?それが「水の文化」とどう関係するのか?答えがあるのか分からないまま、手探りで進めた取材です。私たちは、「水」のある場所に人は吸い寄せられ、そこで交流するものなんだなと感じましたが、みなさんはいかがでしょうか?感想をお待ちしています。(松)

喫茶店の思い出といえば、小さなころに叔母が連れて行ってくれた自宅近所のお店でした。のちにそのお店は喫茶店ではなく、開店前のスナックであったことを知りました。それでも私にとっての喫茶店は、あのお店のカウンター席で、にこにこ笑顔で私を見守る叔母のタバコとコーヒーの香り、そして少しだけ酸っぱいオレンジジュースの味なのです。(飯)

誰とも言葉を交わさずとも、喫茶店に足を運ぶことは社交なのだろう。目に入る人々の装い、手にしているシヨッパ―バッグ。耳に入る談笑、流れる音楽、接客者の声。それにかすかに触れるだけで保たれる「正気」があるような。そんな場を街に求める思い。また少しとってつけたようだが、傍らにあるのが成分の98%以上を水が占める飲み物であること。その意味を考える機会になりました。(秋)

連載記事は特集テーマとは関係ないですが、さりげなくそれぞれを紐づけていたりします。今回の喫茶店やコーヒーとは直接的なつながりはないけれど、「二三味珈琲」と食の風土記「いしり」はともに能登半島。「文化をつくる」では、野田岳仁さんの「島原編」がまとめるヒントに。そして、坂本貴啓さんと巡った「筑後川」では、島原の「雲仙岳」が望めたことで、満足できる一枚が撮れました。(力)

自分でコーヒーを淹れる人なら「ハリオ」と「カリタ」はご存じのはず。実は私、この2社を海外企業だと思い込んでいました。サイフォンやハンドドリップは1920年代にアメリカで流行したもののコーヒーメーカーに置き換わってしまったのに、日本では脈々と生きつづけ、いまや逆輸入の形で重宝されているそうです。「ガラバゴス」と揶揄されがちな日本ですが、捨てたものじゃないですね。(前)

ミツカン水の文化センター機関誌 水の文化 第78号

ホームページアドレス

<https://www.mizun.gr.jp/>

発行

ミツカン水の文化センター

〒104-0033

東京都中央区新川 1-22-15 茅場町中荳ビル
株式会社 Mizkan



発行日

2025 年 (令和 7 年) 1 月 初版 1 刷

企画協力 (氏名 50 音順)

沖 大幹 東京大学大学院工学系研究科教授
陣内秀信 法政大学名誉教授
鳥越皓之 早稲田大学名誉教授

制作

松本裕佳
久保悦史
飯野真奈実

編集製作

前川太一郎 編集
秋山健一郎 編集
中野公力 デザイン・撮影
蔵田 豊 デザイン

執筆

秋山健一郎 (pp.14-15)
佐々木 聖 (pp.12-13、pp.22-23)
手塚ひとみ (pp.24-27)
開 洋美 (pp.20-21、pp.28-31、pp.34-35)
前川太一郎 (pp.6-11、pp.16-19)

撮影

大平正美 (pp.4-5、pp.12-13、pp.24-27)
川本聖哉 (pp.10-11、pp.20-21)
鈴木拓也 (p.7、pp.16-19)
中野公力 (pp.44-49)
藤牧徹也 (p.6、pp.14-15、pp.36-43)
渡邊まり子 (pp.22-23、pp.28-31、pp.34-35)

印刷

中荳総合印刷株式会社